

和讃と聞く

其の二九八

親鸞さまの

【本文】

ぶっち 仏智の不思議をうたがひて

自力の 称 念このむゆる

へんじけまん 辺地懈慢にとどまりて

ぶっ 仏 恩報ずるころなし

【意記】

本来 人間の心と言葉では到底捉えきれない阿弥陀様のお心を、対等の立場上からの目線であれこれ思い、言葉にし、

自分を抛り所にし、自分の力を頼りにして成仏できると思っている人がいます。この人の口からは、自分のお陰という念仏が出てきます。

このような人は、阿弥陀様のお浄土に往生することはありません。

阿弥陀様のお陰という感謝の思いもありません。

【私の味わい】

スポーツなどで競技後の勝利インタビューを聞くことがあります。蛍雪の功が実を結んだ万感の思いが溢あふれていて、聴く者にその心が伝わってきます。ただ、自分の工夫や努力が実を結んだという言い方もありますが、殆どで支えてくれた人や周囲の言及や深い感謝があります。「お陰様」という言葉には、自らの力を支えてくれる他者とその実際についての素直な敬意が表れていると思うのです。これが、全部自分の努力の賜物です。と終始したらどう感じられるでしょうか。

これらのエピソードは、身近な出来事を取り上げたお話でした。その目的は、自らに感謝するか、周囲に感謝するかをどちらを前面に出すかこの視点を取り上げることになりました。ただ、一見道徳的なお話に終わりそうなこの題材を踏み台にしても、一段深く考えたいのが、お念仏の世界は100%阿弥陀様のお陰ということ。

自分のお陰50%、阿弥陀様のお陰50%ということではありません。これが前段のお話しとは全く違うところです。人間誰しも自分中心の視点、煩惱を捨てることは出来ません。自分、自分の所有するもの、家族、この都合を軸に日常を生きています。その延長上でお念仏を考えると、どうしても自分のお陰でとなえているもの、という思いになってしまうのです。我が宗派においては、お念仏といいますが、それは、阿弥陀様が私にとなえさせて下さった、例外なくという意味です。口に発せられた六文字の出どころ、その詳しい経緯いきさつ、緯を聞く。仏様発でこそのお念仏なのだ。 (悠本)